


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

ウンコはどこから来て、どこへ行くのか

－ 人糞地理学ことはじめ －

湯澤 規子 著 ・ ちくま新書

ISBN978-4-480-07330-3

840 円 + 税

読み終わって、学問の世界は広い、いろいろなことを研究する学問があるものだなあ、と深く感銘した。今まで、私が接した学問にはない面白さがある。著者自身は、「人糞地理学」などと言っているが、地理だけにとどまらず、環境、経済、歴史にも触れ、時には、哲学的な思索も深める。

エピソードの中で著者は、こう述べる。

排泄をするという行為は誰もがすることなのに、ところ変わればその行為やその場所や道具はこんなにも違う。本書の主役であるウンコの扱いもずいぶん違う。また、ところだけでなく、時代が違ふとさらにバラエティー豊かな世界が広がっている。人間って面白いなあ。

……(後略)……

(p.221)

さらにこうも述べる。

そして、こと「食べること」と「ウンコをすること」はいずれも、私たち自身の中で完結するものではなく、本来的には外の世界に開かれ、様々な「いのち」を受け渡しの環の中に位置づけられる行為であった。その意味で人糞地理学は人間学であると同時に、環境学でもあるといえるだろう。

(p.223)

著者の問題提起は、「朝のトイレで一瞥されることもなく水に流されている」ウンコは、身近さを失い、「自分」というよりも「他者」であり、触れたくない「汚物」と認識されることが多くなった。

そして「汚物」と名づけられた瞬間に、私たちはウンコについて深く考えることをやめてしまっていないか。

というのである。

私は、やられたなあと思った。

時々、出ないで終日不快な思いをする日があっても、日常的には、それ程ウンコについて思いをいたすことはない。しかし、これはどっこい、奥行きの深い問題である。

まず、著者は、第三章「宝物としてのウンコ」(近世日本の下肥)、第四章「せめぎあうウンコの利用と処理」(近代における「物質環境」の再編)の中で、農業の発達と肥料という視点で、実に緻密な考察を展開する。

さらに、第五章「都市でウンコが『汚物』になる」(産業革命と大量排泄の時代)で、ついに、「衛生問題の誕生と尿尿を『処理』するという発想」が生まれたことを指摘する。

そして、第六章「消失するウンコの価値」へと続く。

第七章「落とし紙以前・トイレットペーパー以降」(お尻の拭き方と経済成長)で、お尻の拭き方の多様性について述べる。

植物の葉、皮、茎、殻、木片、棒切れ、海藻、縄など、地域の地形、植生、産業などに関わって、その世界は驚くほど多様である。

と述べている。路の葉は、どこでも使われていたようで、

言語学者の金田一京助が、「拭き」という言葉は、植物の「路」に由来すると説明しているのも興味深い。

と著者は紹介していて面白い。

1974 年 5 月「信濃路」という雑誌に、当時信州大学文学部教授だった馬瀬良雄氏が長野県下 500 か所で、落とし紙以前の世界について調査して、論文にまとめているとのことである。

さながら「長野県尻拭き地図」といったところだろうか

と著者も感嘆している。

随所に思いもよらぬ事柄を発見するが、例えば、こんな興味深い話が紹介されている。

ウンコの値段は仕入れ先によってランクがあった。貧富の差によって食べるものが異なれば、ウンコに含まれる内容にも違いがあるからである。武家の糞尿は高価だった。

(p.61)

「長屋」の便所に溜まる糞尿も大家の重要な収入源であり、財産だった。

(p.61)

糞尿が、貴重な肥料だった時代の話である。ちなみにその支払いは、貨幣のほかに、野菜や漬物など現物との交換もあったという。

豊富な事例、エピソードと、緻密なデータとを駆使して、一気に読ませる。日常的なごく平凡な事象について、新しい視点から切り込む著者の心意気に感銘する。

好著であるが、はたして、この本は売れるのだろうか、と心配している。皆さん、試しにご一読を。

今月の一冊 (令和3年2月号 第164号)